新日本製鐵(株)釜石製鐵所の社宅街について

—小佐野社宅 (1936~37), 小川社宅 (1940~41)—

A HISTORICAL STUDY ON KOSANO (1936-37) AND KOGAWA (1940-41)
COMPANY'S RESIDENTIAL AREA OF
NIPPON STEEL CORPORATION KAMAISHI WORKS角 哲^{*1}, 角 幸博^{*2}, 池上重康^{*3}

Satoru KAKU, Yukihiro KADO and Shigeyasu IKEGAMI

Abstract

This paper examines the case of the *Kosano* (1936-37) and the *Kogawa* (1941-42) company's residential area of *Nippon Steel Corporation Kamaishi Works*. We show the restored diagrams of each areas and housing plans, and make consideration on it. Each area was characterized by public squares, named "*Hiroba*". A community was made up by public squares where probably had a function of fire prevention. Both areas have evaluation as sustainable housing areas. Those instances are significance from comparing with development of suburbs housing areas because history of company's residential area makes clear development of industrial city.

Keywords : *company's residential area, Nippon Steel Corporation, Modern, Industrial City, suburbs, Kamaishi*

社宅街、新日鐵、近代、工業都市、郊外、釜石

1.はじめに

1-1.社宅街研究の目的と意義

本稿は岩手県釜石市に日本製鐵(株)釜石製鐵所社宅街として開発された小佐野社宅街(1936~37)、小川社宅街(1940~41)を対象に全体配置計画や区画配置、住宅平面など社宅街が住宅地としての条件を取得した経緯について史的に明らかにするものである¹⁾。

釜石製鐵所では配置図などの資料を保管していないため、本稿では、現地調査に基づき配置図、区画図、住宅平面を復原し、考察を行った²⁾。

社宅街先行研究としては、砂本文彦「鷲尾勘解治と新居浜・住友山田団地について」があり³⁾、その意義を「山田団地の計画、建設は、新居浜の住友別子銅山の工業化において総合的な見地から行われていることから、これを研究対象として得られる知見は自ずと社宅としての、そして、郊外住宅地としての学術評価へと結びつくと期待される。」と記しており、本稿も同様の視点を基本として論を展開した。

西山卯三は、社宅街開発は「職場の階級関係から全面的に解放されなければいけない」という条件付きで「将来の住みよい都市づくりに見逃すことのできない形態」と記している⁴⁾。釜石製鐵所社宅

街は後述するように良好な住宅地としての条件を備える。福利厚生施設などの都市施設を伴った社宅街開発は、社員に都市生活をも享受してきた。よって、当該社宅街開発過程を明確にすることはインフラから福利厚生施設に至るまで、製鐵所の発展により都市機能を取得した釜石市の変遷と、社宅街開発当時の工業都市が抱える問題点を明確にする一断面になると考えられる。

社宅街研究は土地会社や私鉄開発など分譲型の住宅地事例とは異なり、従来の郊外住宅地研究と異なった視点で評価を行う必要がある。片木篤は「(資本主義の)寡占期には資本を労働者の再生産のための設備に回すことで、間接的に商品生産の拡大を図ろうとする宥和策が採られるようになる」と記している⁵⁾。このような論点で社宅街を工場の生産システムの一部として見ると、社宅街開発は住宅地開発のみがその目的でなく商品生産の拡大も意図されていたといえ、分譲型の住宅地開発とは性格が異なる。同様の理由で、近代化遺産としての意義も考慮に入れるべきであろう⁶⁾。

1-2. 新日鐵社宅街の研究

現新日本製鐵(株)の社宅街研究としては、輪西製鐵所(現室蘭製鐵所)社宅街⁷⁾と八幡製鐵所社宅街⁸⁾に関する研究、報告がある

*1 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻
大学院生博士後期課程・修士(工学)

*2 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻
助教授・博士(工学)

*3 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 助手・工修

Graduate Student, Div. of Urban and Environmental Eng., Graduate School of Eng.,
Hokkaido Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., Div. of Urban and Environmental Eng., Graduate School of Eng.,
Hokkaido Univ., Dr. Eng.

Research Assoc., Div. of Urban and Environmental Eng., Graduate School of Eng.,
Hokkaido Univ., M. Eng.

が、釜石製鐵所社宅街についての研究は見られない。これらは基本的に幹部を含めた職員社宅を対象とし、職工社宅には触れられておらず、本稿のような職員と職工を対象とする事例は、新たな知見を提供すると思われる。特に日本製鐵釜石以降の釜石製鐵所社宅街には、住戸配置の中心に「広場」という空間が見られ、特徴的な住宅地開発が展開された。このような事例は輪西、八幡には見られない。また、この事実は砂本が先の論文で導いた結論⁹⁾とも異なる社宅街事例といえ、釜石製鐵所社宅街の開発の特徴として指摘できる。

社宅街研究は以上のような視点に加え、近年盛んに行われている郊外住宅地との比較研究の一翼を担う事例としても意義深いものと考え¹⁰⁾。

2. 新日鐵釜石とその社宅街

岩手県釜石市は近代製鉄発祥の地で¹¹⁾、釜石製鐵所は1874年工部省釜石製鐵所が現在地に設置されることに始まる。その後、1887年釜石鉾山田中製鐵所、1934年日本製鐵（以下、日鐵）、1950年富士製鐵などの度重なる改組を経て、1970年新日本製鐵（以下、新日鐵）となり現在に至っている。

社宅街は大渡川沿いを線状に広がる市街地を、海から山の方向に展開した（図1、表1）。工部省釜石製鐵所開設以降、明治年間に構内（写真1）、松原、棧橋の各社宅街が工場敷地内や製鐵所に隣接して建設され、これらは官営時代の配置図¹²⁾で確認される労働者長屋を基準として建設されたものと考えられる¹³⁾。大正年間には向、公園（写真2）、中妻の各社宅街が開発された¹⁴⁾。公園、中妻以外の社宅街は日鐵発足時の工場拡大に伴い解体された。同じ頃、所員の急激な増加を受けて1936年に上中妻（現上中島）と小佐野社宅街が、1940年に小川社宅街が相次いで開発され、1941年に用地買収した松倉社宅街が戦後に開発される。

戦後、中妻社宅街は土地区画整理の対象となり、木造住戸は順次解体された。1953年には釜石製鐵所では初の鉄筋コンクリートアパート（以下、RC造アパート）の社宅が建設され、現在も社宅として使用されている。小川および小佐野社宅街は、全国的流れを受けた釜石製鐵所の持家促進事業¹⁵⁾により1969および71年、社員を対象に分譲され、区画は大きく変わらず、現存住宅も少なくない。上中島、松倉はその一部がRC造アパートの社宅地として利用されているが、1980年までに木造長屋は全て撤去された。

表1 釜石製鐵所社宅街

地区	対象	開発年代	開発規模
構内	職員/職工	明治年間 (1938年消滅)	職工長屋約1,000戸ほか
松原	職工	大正年間 (1938年消滅)	350戸
棧橋	"	"	104戸
向	"	"	80戸
公園	職員/職工	1917年	28,400㎡、職員154戸、職工174戸?
中妻	職工	1917, 1937~39年	91,000㎡
上中島	"	1936~37年	186,000㎡、154棟924戸
小佐野	職員/職工	"	151,000㎡、職員71棟、職工30棟
小川	職工	1941~42年	152,000㎡、294棟1078戸(第1期)
松倉	"	1941~42年用地取得	502,000㎡

1：開発年代/規模は戦前のみで、戦後に関しては記していない。

2：公園（鈴子）、中妻、上中島、松倉にはRCアパートが建設され、現在も社宅として機能しているが、日鐵時代の区画・木造建物は見ることが出来ない。

3. 全体配置計画

3-1. 概要

多くの企業社宅街に見られるように¹⁶⁾社宅街における居住地区、区画、住宅は企業内における職制を反映し、大きく職員（高等教育卒）と職工の社宅街に分けられる¹⁷⁾。いずれもさらに細分化された職階級があり¹⁸⁾、入居する社宅の等級に反映される。これは時として敷地の高低差に反映されることもある¹⁹⁾。

日鐵時代、整然とした配置計画の下で建設された住戸は（写真3）、全て木造下見板張で、小佐野では一部寄棟屋根の住戸が見られるものの切妻屋根を基本とし、セメント瓦葺である。

新日鐵釜石社宅街の工場との位置関係は図1の通りで、本稿で対象とする社宅街は、日鐵発足以前に開発された社宅街と異なり工場と離れた位置に計画された。これは線状都市ともいえる谷間の沢地に沿って成立した釜石市の地理的特性によるものと考えられ、中でも小川社宅街は敷地に余裕のない山間の傾斜地に計画されている。また、工場規模拡大により工場から離れた敷地に社宅街が開発されたという事実は、工場敷地が土地的に飽和したため、郊外住宅地的な開発が行われたと捉えることもできる。

日鐵発足以降に開発された上中妻、小佐野、中妻、小川、松倉の各社宅街には、沢地で敷地的に余裕のないなか、後述する路地よりも大きな概念でのコミュニティを誘発する「広場」²⁰⁾を中心とした計画意図を読みとれ、全体配置計画を特徴付けるといえる。このような計画は、管見では三井東洋高圧化学（株）北海道工業所の「コモンガーデン」²¹⁾をおいて他にない。「広場」の設置は福利厚生施設の改善・新設を目指した日鐵の方針²²⁾と関連するものであろう。

図1 釜石製鐵所社宅街位置関係図

凡例：1.点線は工場位置 2.●は現JR釜石駅 3.■は現JR小佐野駅

写真1 構内社宅街遠景
(釜石市鉄の歴史館所蔵)

「広場」は居住性を高めるだけでなく、火災による延燃防止機能も意図されたと考えられ²³⁾、共同浴場を伴う場合もあり、地区生活の機能的な中心であったといえる。

3-2. 小佐野社宅街 (図2)

小佐野社宅街は、1936から37年に151,000㎡で職員および職工を対象に開発された。倶楽部、供給所を中心に大きく東西に分かれ、「広場」を中心に平家の住戸が配置している。

西地区は戸建の2級社宅および二戸建の3級社宅から四戸建の5級社宅までの職員地区である。副部長対象など等級の高い社宅が課長以下等級が低い社宅を挟んで配置される。これは後述する接道方法により生じる利便性などに配慮したものと考えられる。住戸は全て北入りで南面に大和打ちの塀で囲まれた庭を持つ。

東地区は六戸建の7級社宅の職工地区で、第一浴場を伴った「広場」を中心に住戸が33棟198戸配置される。幹線道路南側には7棟42戸および第二浴場が確認される。住戸は全て北入りで、各戸に庭は設けられていない。また、東地区を東西に3分する道路に共同井戸²⁴⁾が配されていた。

西地区の幹線道路南側には、1937年小佐野分院として発足した付属病院（現せいてつ記念病院）などの福利厚生施設が建設された。

3-3. 小川社宅街 (図3)

1940から41年に152,000㎡で開発された傾斜地に位置する職工対

図2 小佐野社宅街復元配置図 (1947年頃)

点線は地区境界、網掛けは図4に対応

図3 小川社宅街復元配置図 (1947年頃)

点線は地区境界、網掛けは図5に対応

象の社宅街である²⁵⁾。

全体は4地区で構成され、住戸は全て2階建、5級から8級の二軒および四軒長屋である。第1から第3地区には一般作業員用の四軒長屋（8級）が配置された。第4地区は地形的に高く、組長用、伍長用と推測される²⁶⁾二軒長屋（5級）と四軒長屋（7級）が建設された。小川社宅街には5つの「広場」が確認できる。第1から第3地区の中心に位置する「広場」と、南北に走る幅員の広い道路に面する長屋の妻側には、モルタルの壁が確認されることから（写真4）防火帯としての意図も読みとれ、子供の遊び場やラジオ体操の会場としてコミュニティ形成の場にもなったという²⁷⁾。

供給所、倶楽部は第3地区と第4地区の中間に設けられ²⁸⁾、同じ職工の中でも職階級の高い第4地区居住者の利便性を考慮したものと考えられる。

4. 区画配置計画

4-1. 小佐野社宅街 (図4)

職員地区では全戸の玄関が北面し、前面道路または東西の路地からのアクセスとなる。南面には大和打ちの木塀に囲まれた庭を持つ。各区画は側溝を伴った東西の路地²⁹⁾により南北に二分される³⁰⁾。

3級と4級の区画は南北32m東西100mで、平家の二軒長屋が8棟16戸配置されるのが基本となる。このうち北側の住戸4棟は北に接する前面道路から、南側の住戸4棟は北面する路地からのアクセス

図4 小佐野社宅街復元区画図 (1947年頃)

図5 小川社宅街復元区画図 (1947年頃)

である。南側の4棟は南北の通路によりさらに東西に2分される。これは角地でない住戸2棟のアクセスの利便性を考慮して設けられたと考えられる。

5級の区画は南北32m東西75mで、平家の四軒長屋が6棟24戸配置され、3級および4級と同様、側溝を伴う東西の路地により南北に、南北に走る通路によって東西に2分される。

4-2. 小川社宅街（図5）

第1から第3地区では、全戸南および北に接する前面道路からのアクセスとなる。第4地区の多くは傾斜地にあるため石垣などによって区画され、アクセスのための路地を設ける場合もある。

8級社宅の区画は南北18m東西72mが基本となり、2階建の四軒長屋が8棟32戸配置される。区画は小佐野と同様側溝を伴った東西の路地によって南北に2分され、この路地に6棟24戸に2個の割合で井戸が設けられていた³¹⁾。区画内南北で接道方式が変わらないため利便性に差は見られない。各戸に庭はないが、背中合わせに向かい合う4戸に囲まれた空間は半公共的な「広場」よりも小さな概念でのコミュニティ形成の一要因となった。7級社宅の区画は住戸平面に大きな差がなく基本的な構成は8級と変わらない。しかし、物入れが付加されるため、路地空間は8級よりも閉鎖的な印象を受ける。

5級社宅の区画は東西約32mを基本とする。住宅は2列で配置され背中合わせの4棟で路地を構成する。従って玄関側と勝手口側に路地が生じるが、各戸物入れと大和打ちの木塀で囲まれた庭、井戸を持つため、各戸の独立性が高い。

5. 住宅の平面構成

5-1. 概要（表2）

釜石製鐵所社宅街に建設された住戸は、明治から大正年間に建設

表2 住宅の平面概要

地区	等級	対象	階数	戸数	1戸の延床	棟の延床	居室面積の割合	居室構成(1/2階)
上中島	7級	職工	平家	6戸	8.25坪	49.5坪	72.72%	6,6
小佐野	2級	職員	"	1戸	30.50坪	30.5坪	45.08%	8,6,6,4,5,3
	3級	"	"	2戸	30.50坪	61.0坪	50.82%	8,8,6,6,3
	4級	"	"	"	20.00坪	40.0坪	46.25%	8,6,4,5
	5級	"	"	"	20.00坪	40.0坪	42.50%	8,6,3
	"	"	"	4戸	16.00坪	64.0坪	56.25%	6,6,4
	7級	職工	"	6戸	9.00坪	54.0坪	61.11%	8,3
小川	5級	"	2階	2戸	17.00坪	34.0坪	52.94%	6,6/6
	7級	"	"	4戸	11.00坪	44.0坪	54.54%	6/6
	8級	"	"	"	10.00坪	40.0坪	60.00%	6/6

註1：上中島に関しては、現地聞き取り調査による

註2：小佐野、小川等級に関しては『労働ニュース』『小佐野分譲要項』による

註3：ゴシックは調査物件を示す

されたものは棟割り長屋であったという³²⁾。日鐵時代に開発された社宅街では2級から5級および、7級、8級が確認される³³⁾。施工は「ナガヤグミ」という地元の建設業者による³⁴⁾。各戸に便所が設けられたため、共同便所は新設されなかった。職工社宅の路地において、先に述べたような半公共的な空間を生じた要因は、住戸入口の反対側に入り隅を生じる住戸平面型であったことによる。寒冷地ではあるが同時期に建設された輪西製鐵所（現室蘭製鐵所）のような二重窓はない³⁵⁾。職員長屋では会社支給のコークスストーブで暖をとる、眼鏡石も確認されるが、職工社宅にストーブはなかった³⁶⁾。

5-2. 職員社宅

小佐野職員地区の3級社宅（図6、写真5）は、8、8、6、6畳の居室構成で副部長が入居した。3畳の女中部屋を持ち、内風呂、便所、井戸が各戸に設けられた。女中室以外は竿縁天井で、襖や障子などの建具が入り、床の間、縁側などの造作がなされた。

写真2 完成当時の上中島社宅街の様子
（『鐵と共に百年 写真・資料編』より）

写真3 公園（鈴子）社宅街役宅
（釜石市鉄の歴史館所蔵）

写真4 小川社宅街の様子
（所内報『かまいし』より）

写真5 小佐野社宅街3級長屋外観
（2000年撮影）

写真6 小川社宅街8級長屋外観
（2000年撮影）

写真7 小川社宅街5級長屋外観
（2000年撮影）

5級社宅(図7)は、6、6、4畳の居室構成で高等教育卒の職員が入居した。床の間や廊下、手洗い、洗面はなく庭も小さくなるものの、天井仕上や風呂、便所、縁側に大きな差は見られない。

5-3. 職工社宅

小佐野社宅街の職工地区に建設された7級社宅(図8)は8、3畳に台所の居室構成で、内風呂はない。同じ時期に建設された上中島7級社宅(図9)と比較すると、外便所としたことでわずか3畳ながらも独立性の高い居室を設けることが出来た。

職工社宅に独立性の高い居室を設けることは、社宅建設の一つの課題となった³⁷⁾。当時は労働体制が3交替制で昼間の仮眠を要する職工が多く、職工の安眠と家族の日常生活を確保する必要があったからである。この課題に対する最も明快な解決策は、小川社宅街に見られる2階建住戸の建設である。

小川社宅街の8級の四軒長屋(図10、写真6)は、1階に6畳と台所、2階に6畳の居室構成であり、2階に独立した居室を確保した。区画内の北側に配置された住戸の2階には吹き下ろし風の防寒対策により南側のような窓がなく、代わりに掃き出し窓が設けられた³⁸⁾。この掃き出し窓は7級および5級の社宅にも見られる。

7級および8級の社宅には道路側にスノコの濡れ縁が見られる。路地側は庭のないため、道路側にスノコ縁を張り出すことにより、前面道路側に、庭の機能を持たせたと考えることが出来る。

5級社宅(図12、写真7)は1階が6、6畳に台所、2階に6畳の居室構成で、内風呂と廊下が見られる。

これら住戸の居室面積の割合は表2に示した。小川社宅街に建設された職工社宅が2階建であるのは、独立性の確保のみが目的ではなく、限られた敷地内で最大限の戸数を確保しようとしたものとも考

えられる。

6. 福利厚生施設

僻地型の社宅街開発³⁹⁾は一般的に都市基盤施設を含む総合的な開発となる場合が多く、様々な福利厚生施設も同時に建設された。釜石製鐵所社宅街の開発でも同様であり、社員は都市生活を享受されたといえる。基本は生活必需品を販売するための供給所⁴⁰⁾や共同浴場で、倶楽部(写真8)⁴¹⁾や迎賓館「楽山荘」(写真9)⁴²⁾など文化・娯楽施設、学校(写真10)などの教育施設、グラウンドなどの体育施設⁴³⁾、病院などの医療施設などが建設され一般市民にも広く利用されたという。当該社宅街を特徴付ける「広場」もこのうちのひとつといえるだろう。また、1917年に単身赴任の職員を収容するために発足した合宿所(後に寮と改称)は、日鐵発足以後の社員増加に伴って順次建設され⁴⁴⁾、終戦時には14棟、2580人を収容した⁴⁵⁾。

福利厚生施設は、社員全般に利用されるものであるが、その計画位置は必ずしも社宅街の中心、すなわち全ての居住者にとって利便性の高い位置にあるわけではなかった。これは社宅街における職階級による棲み分けに通ずると考えられる。小佐野の供給所や倶楽部が社宅街のほぼ中心にあるのに対し、小川では職階級の高い社員の居住する第4地区居住者の利便性がよい位置にあることからそのことが指摘できる。

7. むすび

以上のように、現新日鐵釜石の社宅街開発は、インフラの整備⁴⁶⁾や福利厚生施設の建設と相俟って住宅地としての諸条件を取得し、一漁村に過ぎなかった釜石の急速な都市化を促した要因となった。「僻地型の都市開発」では、社宅街開発は都市開発と同義になり、

図6 小佐野3級長屋(二軒)平面図

図7 小佐野5級長屋(四軒)平面図

図8 小佐野7級長屋(六軒)平面図

図9 上中島7級長屋(六軒)平面図

図10 小川8級長屋(四軒)平面図

図11 小川7級長屋(四軒)平面図

図12 小川5級長屋(二軒)平面図

僻地であった釜石において、社員は都市生活を享受されたといえる。特に、日鐵発足以降は工場から離れた敷地に社宅街が開発され、郊外住宅地的な開発の色合いを強めているともいえる。また、現在も住宅地としての機能を失っていないことは、社宅開発による都市的ストックとして評価することが出来る。

特徴は「広場」を中心とした住戸配置計画である。「広場」と同様な機能をもつ開発事例として、1939年から開発が始まった、北海道砂川市の三井東洋高压化学（株）北海道工業所の社宅街があげられる。1940から45年の第一期工事で4つの「コモンガーデン」を中心に12棟48戸の住戸が配置される⁴⁷⁾。管見ではこの「コモンガーデン」は砂川に見られるのみで⁴⁸⁾興味深い計画だが、戦後は全くみられない。このことから「広場」を中心に住戸配置計画がなされたと考えられる釜石製鐵所社宅街の特徴がより明確になるだろう。特に小川社宅街で顕著だが、地理的特性により十分な住棟間隔をもって計画することが困難な社宅街開発では、庭を持たない社宅地区での居住性の向上と防火対策が課題となるため、必然的に「広場」が計画されたとも考えられる。一方、小佐野と小川の職工社宅の居室面積の割合がほぼ同値であるにも関わらず、1棟の建坪が大きく減少するという社宅用地の効率的な利用という事実がある。

郊外住宅は商品として、或いは個人資産としての性格を有したのに対し、社宅は全て福利厚生施設であることも明確な違いといえる。また、本稿で対象とした職員社宅は、土地会社や私鉄開発による郊外住宅地の独立住宅のような洋式生活の導入などの色合いは薄いことも違いの一つとして挙げることができる。

職工社宅は明治年間の工場創業当時、居住条件としては好ましい評価を与えられるものではなかったが、先に見てきたように、昭和期に入り日鐵が発足すると、敷地的に余裕はない中でも台所や便所を設け、独立した居室を確保するなど居住性を向上させる意図を読みとることができる。資本主義の発展期において資本を労働者の福利厚生に還元しようとした流れに則したものといえよう。以上を踏まえると、以下のような特徴が見えてくる。

第一に、社宅街開発は土地会社や私鉄開発による住宅地と比して、土地所有形態および職住分離という点で対極に位置する。分譲型の住宅地開発では母都市に生活の基礎を置き、職住分離が図られる。社宅街開発では職住近接の開発となる。しかしながら、日鐵発足以降、工場から離れて開発された当該社宅街は郊外住宅地的な色合いも含んでいると云える。また、「工業都市」釜石は電気や水道といったインフラを製鐵所に依存して発展したことから、社員は都市生活を享受されていたと考えられるであろう。

「広場」や供給所などの福利厚生施設は、現在、釜石市や関連企業に移管され広く釜石市民に利用されている。このことは、企業開発による社宅街の宅地開発手法、および社宅開発による都市的ストックとして評価する指標となろう。

第二に、分譲型の郊外住宅地開発が中産階級給与所得者を対象としていたのに対し、社宅街開発では労働階級もその対象となる。住戸は平面的には経済性を追求したものであったが、大小のコミュニティ形成の場として、住戸配置を特徴付ける「広場」や路地空間が積極的に利用され、快適な居住空間となったといえる。また、良好な住宅の供給は、「優秀な労働力を確保するための報償的な意味」もあるであろう⁴⁹⁾。

第三に、分譲された釜石製鐵所社宅街を、現在も住宅地としての機能を失っていない土地会社や私鉄開発の郊外住宅地と同じ視点で見ると、現存する住戸が少なくないことなど、当該社宅街開発の計画性の高さを示す指標となるだろう。また、居住者の多くが職階級の桎梏からの解放された製鐵所従業員であり、現在も良好な住宅として機能している点では、サステナブルな住宅地として位置づけることもできよう。

第四に、従業員の居住性の向上は、間接的には商品生産効率の向上に繋がるとすると、社宅街開発が工場生産システムの一環であったと捉えることが出来る。社宅街開発行為は工場施設と同様に、近代化遺産として評価する可能性があることも示唆できる。

最後に、戦時体制下で物資統制が行われる中、都市部では全国的に住宅不足が叫ばれる一方で、急増する労働者に対して良好な住宅地として社宅街を開発、提供したという当該社宅街の事例は、製鉄業、つまり戦時下における基幹産業としての重要性が開発を可能にしたとも思われる。

本稿では、新日鐵（株）釜石製鐵所社宅街において、日鐵時代に開発された2つの社宅街事例を中心に扱ったが、同時代に開発された釜石や輪西、八幡製鐵所社宅街事例や日鐵発足以前の社宅街の事例、また、国内の他企業や旧植民地に開発された社宅街との総合的な比較などについては及んでおらず、今後の課題としておきたい。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、新日本製鐵株式会社釜石製鐵所の長沢義幸氏、釜石製鐵所鉄友会の方々、釜石市立鉄の歴史館館長浦山文男氏をはじめとしたスタッフの方々、聞き取り調査に協力してくださった方々には、ご多忙の折、多大なるご尽力を頂いた。ここに記して感謝の意を表する。

写真8 鈴子倶楽部
(釜石市鉄の歴史館所蔵)

写真9 戦後再建された現在の楽山荘
(2000年撮影)

写真10 私立 釜石鉱山小学校
(釜石市鉄の歴史館所蔵)

【註記】

- 1) 本稿は、拙稿『新日鐵釜石の社宅街—小佐野社宅（1936～37）について』（日本建築学会学術講演会，2000年）を大幅に加筆，訂正したものである。
- 2) 復元配置図は、『ゼンリン住宅地図2000 釜石市』をもとに，現存する側溝や聞き取り調査で得られたいくらかの資料をもとに区画を復原し，現存住宅から判明した住宅位置に，実測調査を行った平面を配置することで作成した。
- 3) 砂本文彦『鷺尾勘解治と新居浜・住友山田団地について』（日本建築学会計画論文集，No.519，1999年5月）。
- 4) 西山卯三著『日本のすまい3』（頻草書房，1980年）pp.284-285
- 5) 片木篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』（鹿島出版会，2000年）p.32
- 6) 社宅街を近代化遺産として報告した例としては，福岡県教育委員会編『福岡の近代化遺産』『1八幡製鉄所』の中の「08・高見社宅」が挙げられるが倶楽部，神社，一部の門や塀を除いて現存しない。
- 7) 輪西製鐵所（現室蘭製鐵所）社宅街の事例報告としては，『北海道の産業集落』（日本建築学会北海道支部歴史意匠委員会，1984年）「室蘭市新日鉄・日鋼社宅」などがある。だが，本稿のような区画や個々の住宅レベルにおける考察はなされていない。
- 8) 前記『近代日本の郊外住宅地』『25 高見社宅／北九州，八幡』，『福岡の近代化遺産』『1八幡製鉄所』など。
- 9) 前記『鷺尾勘解治と新居浜・住友山田団地について』では，「社宅経営上過剰である住宅地の個性化，差別化を図る意図的な試みは，山田団地の計画に確認することは難しい」と述べられている。
- 10) 前記『近代日本の郊外住宅地』では，社宅街が郊外住宅地として収録されている。
- 11) 我国の近代製鉄は，南部藩出身の洋学者大島高任（おしま たかう）が釜石（現釜石市大橋）で採掘される鉄鉱石を用いて，1857年12月1日出鉄に成功したことに始まる。
- 12) 『鐵と共に百年』（新日本製鐵株式会社釜石製鐵所，1986年）P893参照
- 13) 『新建築』誌連載『建築明治100年』（村松貞次郎・小能林宏城）の第1章（1966年7月），第13章（1967年7月）では社宅の原型は官舎によるものと記されている。特に屯田兵住宅が社宅の原型として用いられたと述べている。
- 14) 明治から大正年間に建設された社宅には甲・乙・丙の3等級があり，平面的・造作的にどのような差異があったかは明らかになっていないが，丙が職工社宅であると推測される。職工社宅は，狭い勝手をついた6畳一間の板敷きで無双窓が入ったという。井戸・便所・風呂は共同である。1918年の労働争議以後は畳が入り，便所・下水などの衛生設備の改善などがなされた。この労働争議以降に建設された長屋には，8畳一間に3畳の勝手がついた長屋が建設されたという。
- 15) 従業員の持家意識の高まりにより，1964年に大迫町祝田と大ヶ口が宅地として分譲された。分譲は抽選式で，通勤範囲内に持家を保有していないなどの条件を満たした社員が対象となった。1957年に日本経団連が打ち出した福利厚生施設合理化の方針が背景にあると思われる。
- 16) 社宅街研究事例としては，池上重康・越野武・角幸博・石本正明・石垣佳政『蘭西および港北地区の社宅街について—室蘭市における住宅地形成—』（日本建築学会北海道支部研究報告，1998年3月），丸山信彦・小林明徳・藤谷陽悦『倉敷紡績・倉敷事務所に所蔵されていた図面について』（日本建築学会大会，2001年）などがある。
- 17) 小佐野社宅街のように，社宅街一地区で棲み分けがなされる場合と，小川のように社宅街毎に棲み分けがなされる場合がある。
- 18) 職工は勤続年数などによって，組長，伍長，一般作業員の3階級に分けられていた。
- 19) 職制が敷地の高低差に反映された背景には，この時期，社宅街開発が工場から離れた敷地で行われ，高燥で眺望の良い位置に住宅を建設しようとする。郊外住宅地的な色合いがあると考えられる。参考文献10のうち「高見住宅／北九州，八幡」にも等級の高い住戸ほど敷地的に高い位置に建設されたことが記されている（p.479）。
- 20) 「広場」という呼称は安藤郁子氏（1955年生れ）からの現地聞き取り調査および，分譲時のパンフレット（『伝單第60号；小佐野分譲』1971年10月）による。
- 21) 前記『北海道の産業集落』『三井東洋高压化学（株）北海道工業所』。設計は王子製紙（株）苫小牧工場社宅街の建設など，三井と関わりの深かった大阪横河工務所。
- 22) 『日本製鐵株式会社社史』（1959年）には「厚生施設の改善，新設に力を注ぎ，さらに拡充計画に伴う労務者の増加，戦時下の労働動員が日鉄全般に亘って，厚生施設の拡充強化を促進し（以下略）」とあり，日鐵時代には社宅を含めた福利厚生施設の拡充が図られたことが伺える。
- 23) 小佐野に先行して分譲が行われた小川では，「広場」も宅地として分譲された。
- 24) 井戸の個数は明らかでない。前記『鐵と共に百年』掲載の竣工時の写真から推測すると長屋2棟に対して1ヶ所のあったようである。
- 25) 1950年には職員社宅も建設された。これらの職員社宅は，戦前に建設された組長長屋と同型の平面である。
- 26) 佐々木由宣氏（1927年生れ）からの現地聞き取り調査による。
- 27) 前出の安藤氏からの現地聞き取り調査と所内報『かまいし』（1961年8月20日付）による。
- 28) 県道（現国道283号）と小川川に挟まれた位置には1959年体育館（現市民体育館）が建設され前庭はスラグ（鉾滓）を埋め立てられ造成された。スラグとは高炉などの溶鉱炉で鉄鉱石を溶かした際に出る非金属の滓であり，埋立や煉瓦生成に用いられた。
- 29) 分譲時の敷地境界線とされ，コンクリートブロック塀が建てられる場合が多かった。
- 30) 分譲時に物置などの造作物があった場所は隅切りが保留され，現在も施されないままになっている箇所もある。現在見られる隅切りは1971年の分譲時以降に施された。
- 31) 前出の安藤氏からの現地聞き取り調査による。しかし，正確な個数に関しては判明していない。
- 32) 前出の佐々木氏からの現地聞き取り調査による。
- 33) 社宅は，建材や間取りの違いなどによって等級が異なる。日鐵釜石製鐵所では1級から8級までの等級が存在したという。詳細に関する資料は見つからないが，輪西製鐵所では，1，2級が幹部社宅，3から5級が職員社宅，6から8級が職工社宅となっている。但し小川社宅街では，職工社宅として5級社宅が確認される。
- 34) 菅原宮雄氏からの現地聞き取り調査により，棟札に記されていたことが判明した。
- 35) 前記の輪西製鐵所知別社宅街では，職員，職工社宅の区分なしに二重窓が確認されるほか，各戸に石炭庫も設けられている。
- 36) 生田金次郎氏（1921年生れ）からの現地聞き取り調査によると，職工社宅では，火鉢を用いて暖をとったという。また，煙突を切った自作の練炭ストーブを用いた場合もあるという。
- 37) 前記『北海道の産業集落』『三井鉾山（株）美瑛鉾業所』では，1936～44年の第2期工事で中2階建の長屋がはじめて建設された。
- 38) 前出の安藤氏からの現地聞き取り調査による。
- 39) 前記『日本のすまい3』（P.273）では，王子製紙（株）苫小牧工場のように処女地に工場施設全般を含めて社宅街を開発する事例を「餅地型」の給与住宅としている。
- 40) 供給所は1886年，直営の酒保として発足した。その後「配給所」や「購買部」と名を変え，運営母体も組合と会社の間を行き来する。現在は関連会社に運営が移管され釜石共栄として広く市民に利用されている。
- 41) 社宅街開発では倶楽部にも職制が反映され，職員用と職工用があった。職工倶楽部が建設されたのは，八幡製鐵所社宅街同様，大正労働争議以降と思われる。
- 42) 1916年，初代所長横山久太郎が数寄を凝らした自邸を建設したことに始まり，戦後はGHQの施設となった。1950年の失火により罹災したが同年再建され，釜石製鐵所の来客接待，宿泊施設として用いられている。1970年の岩手国体に際して，当時皇太子であった天皇陛下がご宿泊されている。
- 43) 1970年の岩手国体では体育館はバドミントン会場に，1952年竣工の球場（スタンド・倉庫のみ現存）は軟式野球会場になり，釜石製鐵所附属体育施設の充実ぶりを伺わせる。
- 44) 寮の入居区分には，学卒，高卒，職工，女子，半島員があった。
- 45) 1960年代は，全国的に寮の建設戸数が社宅建設戸数を上回る時期で，設備の整った豪華な寮が建設された。1961年に1期工事を終えた白鵬寮は「デラックス寮」と称された。また，八幡では老朽化した寮を改築して「新婚アパート」と呼ばれる夫婦向けのものもみられる。
- 46) 所内報『かまいし』（1961年8月25日付）によると，戦後土地区画整理対象となった中妻，上中島（元の上中妻）は釜石市の水道設備を用いたが，小佐野，小川，松倉では土建課水道掛によって供給されていた。『小佐野社宅分譲要項』（1971年）によると小佐野，小川は分譲に伴ってガス，水道が民間企業に移管されていた。このように，インフラは釜石製鐵所の施設が先行していた。
- 47) 前記『北海道の産業集落』『三井東洋高压化学（株）北海道工業所』
- 48) 北海道工業所社宅の原型は三井鉾山（株）三池炭鉱にあり，同社大牟田工業所と同等だが「コモンガーデン」は北海道工業所独自の開発とされている。
- 49) 西山卯三著『すまい考今学』（彰国社，1989年）p.144では，「社宅は優秀な労働力を確保するための報償的な意味を持たされ，都市では一般借家よりも良質あるいは割安という形で提供された。それは一般借家の足りない部分を補完する機能を持っていた」とされている。

(2001年11月6日原稿受理，2002年4月10日採用決定)